

妄想オナトクイズイニツシユ

-SLAVE END CGG集-

MEAN  
♡





【婚隸の儀式編】

純白に輝く礼装、鐘の鳴り響く教会、隣を歩く愛しい人。  
彼女は幸福に感動し、胸を熱くする。

しかし、それは偽りの幸せ。

彼女を待ち受けるのは催眠術による歪んだ誓い。  
憎むべき男への婚隸の儀式だった。

舞台と役者が整い、荘厳な教会の鐘が鳴り響く。

「……ハハハ、は？」

靄がかかったたような意識が徐々に目覚める中、彼女は自身の状況を  
確認する。

「ウエディングドレス……？隣には……ああ、そうね、そうだったわね」

「私は……最愛の人と……結婚……するんだわ……」

彼女は自身が愛する人と結ばれる幸福を思い出す。



—時も死が二人を分かっまで愛し合うことを誓いますか？

「はい、誓います…。」

式は粛々と進行し、彼女の心と体も多幸福感と共に高まっていっく。

—その□□を□の証として受け取りますか？

「…はい、受け取ります。」

「部ノイズがはしった様になり聞こえなかつたが、多幸福感に酔う彼女は頷く。

しかし彼女はすでに指輪をはめており、何故か新郎だけが新たに用意しているそれは光輝く「対のリングだった。



彼女は純白のドレスにその身を包んでいようと思っ込んでいたが、  
実際には胸は完全に露出し、スカートはその役目を果たさず可憐な  
ショーツを白目と晒している。

「ああ…ついに私は貴方様から愛の証を授かるのね…」  
最愛の人との結婚式を演じさせられている彼女にとって今この瞬間が  
どれほど幸福に満ちているであろうか。

愛しい人の手が近づき、輝くリングを彼女の乳首に取り付けた。

「んっ……」

甘く痺れるような痛みが走り、彼女は小さく呻く。

「これが、幸福な痛み……なのかしら、これで私は……ご主人様〃のモノ……」

隷属の証たるエンゲージリングが彼女の両乳首で輝く。

「ああ、……私に、こんな幸福が訪れるなんて……」

普段の姿からは想像できないほどに蕩けた表情の彼女を、教会の鐘の音が祝福をしているようであった。

ーゴーン…ゴーン…

荘厳な鐘の音が響くと同時に彼女の顔色が変わる。

「なっ…!?」

瞬間、彼女は正気に戻りその表情が羞恥と怒りに染まっっていく。鐘の音は彼女の正気と催眠状態を入れ替える引き金なのであった。

神父の姿が消え、新郎の顔がはっきりと見える、それは先ほどまで対峙していた敵であり、とるに足らない小物の魔術師だった。

「これは…っ！人生で最低最悪の目覚めの瞬間よ…消えてなくなりなさい」

彼女は何も語ることはないと、すぐさま目の前の男をこの世から消し去るうとした。しかし、意に反して彼女の身体は全く動いてくれなかった。



「なぜ…なの…!?」

自身の身体が言うことを聞かないことに彼女は焦りを感じ始めた。彼女のその反応に魔術師は歪んだ笑みを見せると、得意げに現状の説明を始める。

彼女の両乳首に取り付けられたピアスは特別な魔道具であり、主と誓った相手に取り付けられるとその人に危害を加えられなくなるモノである。

そう説明すると、魔術師は彼女の乳首のピアスをピンツツと弾いた。


「ひんっ！や、やめなさい…！まさか、そんなっ!?」

そして、その魔道具にはまだ効力があると彼女に告げる。  
それはもう「儀式を行おう」とで成立し、「二度と取り消す」とはできなからんぞ。

「ふむむむ……」

彼女の反論を遮るように鐘の音が響き渡り、彼女の意識が塗り替わって行く。

そんな彼女の腹部にはもう「儀式の開始を告げる刻印が浮かび上がっていた。



**「婚隸」**の式の中、男に反抗する術を失った彼女は、その身を捧げるべく最後の儀式を迎えさせられていた。

催眠の力によってそれが自身にとつての至高の瞬間だと、思い込まされたまま。。。

彼女は新郎役である魔術師に抱え上げられ秘部を見せつけるような体制にされる。  
そこに肉棒があてがわれた。

—それでは、二人で誓いの儀式を…  
再び神父の声が響く。

秘部を濡らし、待ちきれないといった様子  
の彼女は頷いた。



「んあっ♡これであっ、わたしはっ、あなた様のっ♡あなた様だけのもの♡」

彼女は嬉しさに目元を細め、快感に身体を震わせる。

その彼女の言葉に答えるように肉棒が動き出した。

「ああっ♡すっ、いい！太くて、熱くてっ…♡私…幸せですら…」

いっそう激しく突き入れられ、彼女の身体がより強い快感に飲まれていく。そして再び、彼女の催眠を解く鐘の音が教会全体に鳴り響いた。

「んうっ……わた……く、しは……っ!!!」

催眠が解けると彼女は現状を把握し息を呑む。

それと同時に催眠状態の自分の行動が脳内をめぐり、徐々に体が震えていく。

「あ、ああ、ああああ……!!!」

怒り、羞恥、憎悪、あらゆる感情が声にならない声となって彼女の口から溢れた。

「ああああああっ!!!許さない……!ゆるさないっ……!!!」

怒り狂った彼女の声とは裏腹に反抗できない身体は、男の肉棒を啜えこみ心地よい刺激を与え続けている。

「ころすっ！殺してやるわ！細胞の一片だってこの世に残してやらな、いいっ！」

威嚇の途中で肉棒を奥深くまで突っ込まれ、声を上げてしまっ。普段の彼女なら殺意のこもった視線だけで相手を委縮させることができたであろう、しかし魔術師は彼女を抱えたまま余裕の笑みを浮かべ、ある事を告げた。

このまま膣内に射精し、同時絶頂をすることで儀式が完了する。それにより意識が完全に塗り替わり、魔術師の下僕として生まれ変わると。

「な…?!いいいやよっ！やめなさい！やめて！あっあああっ！あああっ！」

儀式を完了すべく、嫌がる彼女の膣内に肉棒が深く押し付けられた。

「いやあああああああああつ!!!」

悲痛な叫びとともに男の精が彼女の奥深くに刻み込まれる。同時に絶頂し、快感と絶望に身体を震わせる彼女。

「あ、あえ……？わたくし……は……んう♡」

彼女の表情から怒りの色が消え、その淫裂から白濁が溢れる。

「あ、あ、ああっ♡っ♡っ♡いっ♡っ、わたくしはっ♡♡主人様のモノどっ♡!♡」

催眠が解けたときと同じように彼女の意識が徐々に鮮明になり現状を把握し、その上で歓喜する。そこは以前の彼女の面影はなかった。

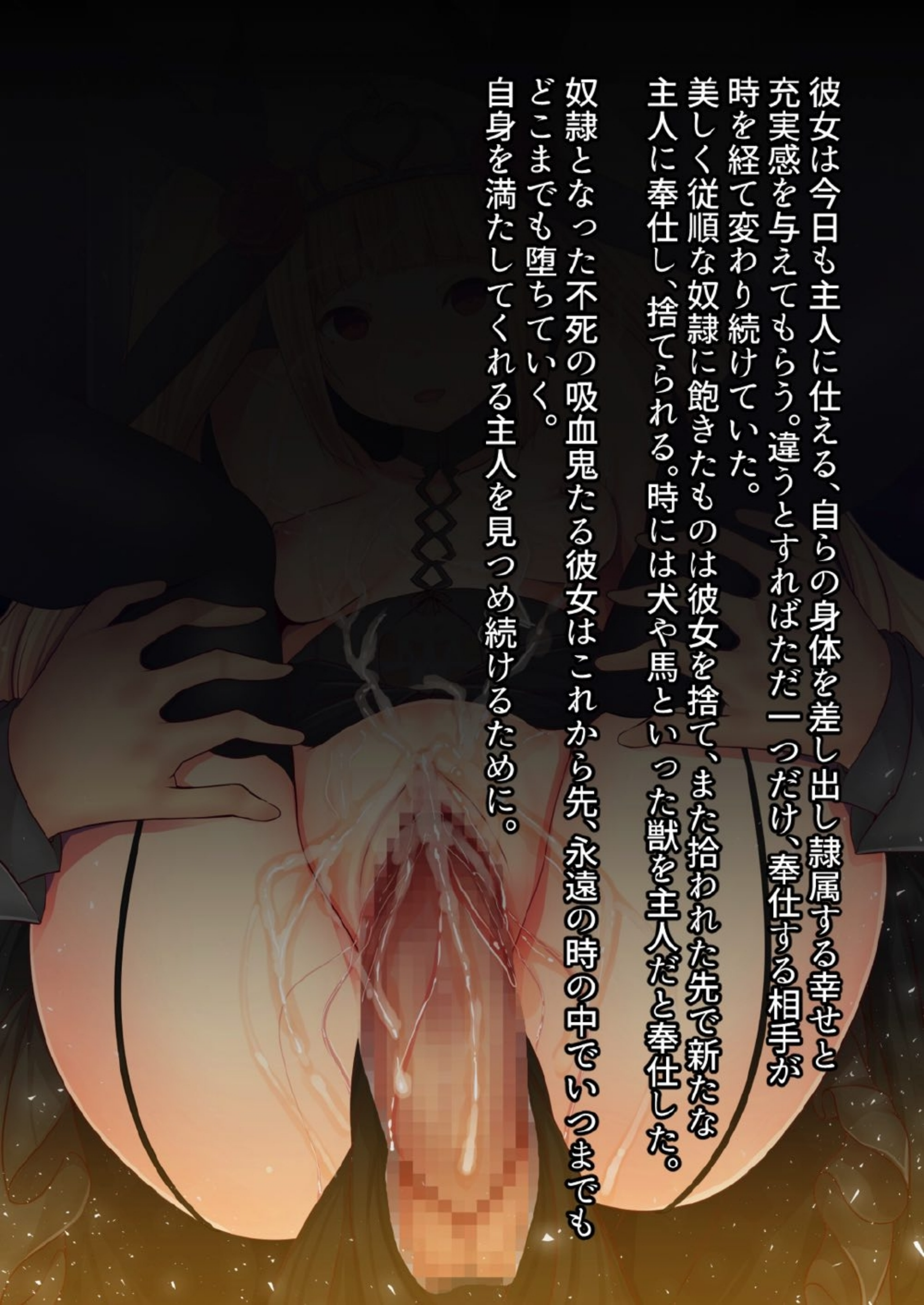


「あっ♡また♡また♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡」

儀式が終わり、その後彼女は数時間におたつて敵であった魔術師とまぐわい続けた。身体中に男の白濁を纏い幸福をかみしめていた。

「こんなしあわせ…あはっ♡わたくしはあ…あなた様に一生…♡」

情欲に濁り、白濁にまみれた顔で彼女は明るく微笑んだ。



彼女は今日も主人に仕える、自らの身体を差し出し隷属する幸せと充実感を与えてもらう。違おうとすればただ一つだけ、奉仕する相手が時を経て変わり続けていた。

美しく従順な奴隷に飽きたものは彼女を捨て、また拾われた先で新たな主人に奉仕し、捨てられる。時には犬や馬といった獣を主人だと奉仕した。

奴隷となった不死の吸血鬼たる彼女はこれから先、永遠の時の中でいつまでもどこまでも堕ちていく。自身を満たしてくれる主人を見つめ続けるために。

【秘密の接待編】

統制機構において、その管理下で運営される組織・団体の監査は職務の内である。

とある監査官の男は、ここ数ヶ月で飛躍的に利益が増加し規模が拡大したある組織が違法行為に及んでいないかを調査をしにきたのだった。

組織を訪問し、監査員は驚愕する。

煌びやかなパーティー会場・淫猥な給仕服をきたメイド達、そしてそれを楽しむ裕福であろう客達。

これは…と、厳しい顔をする監査員。

そんな中、監査員の男はとある部屋へと案内される。

そこで男を待っていたのは…。



監査にやってきた男が案内された部屋の中には、想像もしていなかった光景が広がっていた。

美しい三人の少女達が異物を挿入した尻を突き上げ、こちらに物憂げな視線を向けていた。

それにどこかで彼女達を見たことがあるような気がする。

「ようこそお越しくださいました……本日の主様……♡」

「あっ♡きたきた。今日のご主人様っ」

「ああ……主さまよ、はやくこの疼く躰にご慈悲を……」

戸惑う男に畳み掛けるように三人が声をかける。

「ここがどういう場所か……私たちの肌で感じてください♡♡」

「そう……据え膳喰わぬは、というのであるっ?」

数分前までであった男の監査への情熱は、彼女達の可憐さと淫靡さに圧倒され薄れていた。

男は誘惑に負け二人の少女の尻に遠慮気味に手を伸ばした。

「あんっ♡そう…そうやって、気持ちよくしてえ♡」

「ああ…♡この快感…んう、もつと強く…」


二人の尻を撫でていた男は徐々に遠慮を忘れ、魅力的な肉を揉みしだいた。そして意地の悪い笑みで二人の尻に挿入されていたモノを一気に引き抜いた。

「おおっほおおおおおー!?!?」

「ああっ…そんな、二人だけ…わたくしにもお慈悲を…」

一気に引き抜かれた二人はあまりの気持ちよさに絶頂し、残った一人は羨ましそうにその行為を見つめていた。





「ご主人様、私のもっ…お願いします。二人と、同じ様に♡」  
早く引き抜いて欲しいのか、少女の尻がふりふりと可愛いらしく揺れていた。その股ぐらは触っていないにもかかわらず雫が滴るほど濡れていた。


「はい、焦らさないでください…意地悪です…♡」  
顔を赤らめ乞う姿は男を酷く興奮させた。

「あっ、あっ、ああああああっ♡……!」

ついに待望の瞬間が訪れ、彼女は大きく身体を震わせながら、激しく絶頂した。

「な、なあ。そっちの相手ばかりするなよお♡次はこっちい」  
「ま、待たぬかつ、主さま、余の躰も熱く滾っておるぞ……♡」  
尻のモノを引き抜き終わると、二人ともぬれそぼった股間をこちらに見せつけていた。





三人がアピールを続ける中、男は彼女達の美しい身体を満遍なく撫で回していた。肌に手が触れただけで敏感に反応を示し、体のどこかを触っても発情してしまう身体を持つ彼女達は男に撫でられるたびに顔をとりけさせ、その時を今か今かと待ち続けていた。



「あああっ♡き、たあああっ!」

ついに男の肉棒が三人のうち一人に挿入された。  
淡い刺激で焦らされていた身体は強い刺激に喜び  
打ち震える。

「あっ、ご主人様♡すごっ、いっ♡おっきい…♡」

しかし、一人の相手をしていると他の二人がより激しく  
主張する。

「主さまあ、早く余の軀を蹂躪してくれまいか♡」

「わたくしも…はやく♡ご主人様あ…♡」



「あっ♡主人様♡きもちいいよお……!ふあ♡」

「だめえっ♡いくっ…イツちやうう…あっ♡あっ♡」

男の肉棒が膨らみ彼女の中になっぷりと精を吐き出した。

「あああああ♡あっ♡あっ♡いっ♡いっ♡イツちやうう♡♡」

ピクピクと身体を痙攣させた彼女から男は肉棒を  
引き抜き、また別の少女に挿入した。



「あるじさまあ♡待ちくたびれたぞ…♡」

「あああ♡余の軀を存分につ♡楽しんでくれ♡」

激しく抽送を繰り返すと紫髪の少女は嬌声を上げながら男に言う。

「あっ♡これ、すごい♡あん♡あ♡びくびく♡って♡」

「あるじさまあ♡余のなかにいっ♡全てだしてえっ♡」

少女がそう言うのとほぼ同時に男が射精し、彼女は  
その刺激で激しく絶頂した。



「はあ♡も、もう待てません…はやく、はやく♡♡」

最後まで待たされた少女は、息を荒くし男の挿入を待ちわびていた。そしてついに彼女が待ちに待ったその時がやってきたのであった。

「あっはああああああ♡きたあああ♡♡！」

一気に奥まで挿入された彼女は快感に震える。抽送のたびに体をビクビクとさせ、淫猥な水音を響かせた。



「あぁっ♡♡ご主人様のお○んぼすごいっ♡♡二人の後なのに♡」

気品ある見た目とは裏腹に卑猥な言葉を叫ぶ彼女。  
そんな彼女の尻を、男は挿入しながらひっばたいた。

「ひん♡♡あぁ♡♡申し訳いません♡♡ご主人様あ♡」

そのように調教されているのか、ひっばたく度に嬌声  
をあげ、膣内を締め付ける。

「お○んぼ膨らんでるっ♡♡なかに…だしてくださいっ♡♡」

限界をこえた肉棒からは熱い精液が噴き出し、  
彼女の膣内に注ぎ込まれた。

「イクっ♡♡イっちやいます♡♡イクっ♡♡イクっ♡♡イクっ♡♡」

その後も監査員の男は仕事の事を忘れ、長時間にわたって彼女達を可愛がった。

存分にその肢体を堪能してもらえた彼女達は、どこか嬉しそうに頬を紅潮させ男を見つめていた。

「……主人様……またのお越しをお待ちしております……♡」

三人が声を揃えて言う。

大量に注ぎ込んだ精液が彼女達の股をつたっていった。



【監査員Aの調査記録】

対象の組織には違法性は見受けられず、概ね健全な運営状態である。  
顧客への誠意ある対応と構成員のプロ意識は他に類を見ないほど優れている。  
今後も引き続きこちらの組織への監視・訪問を定期的  
に続ける所存である。

繰り返すが、こちらの組織には違法性はない。  
これは紛れもない事実である…。



【機械洗脳編】

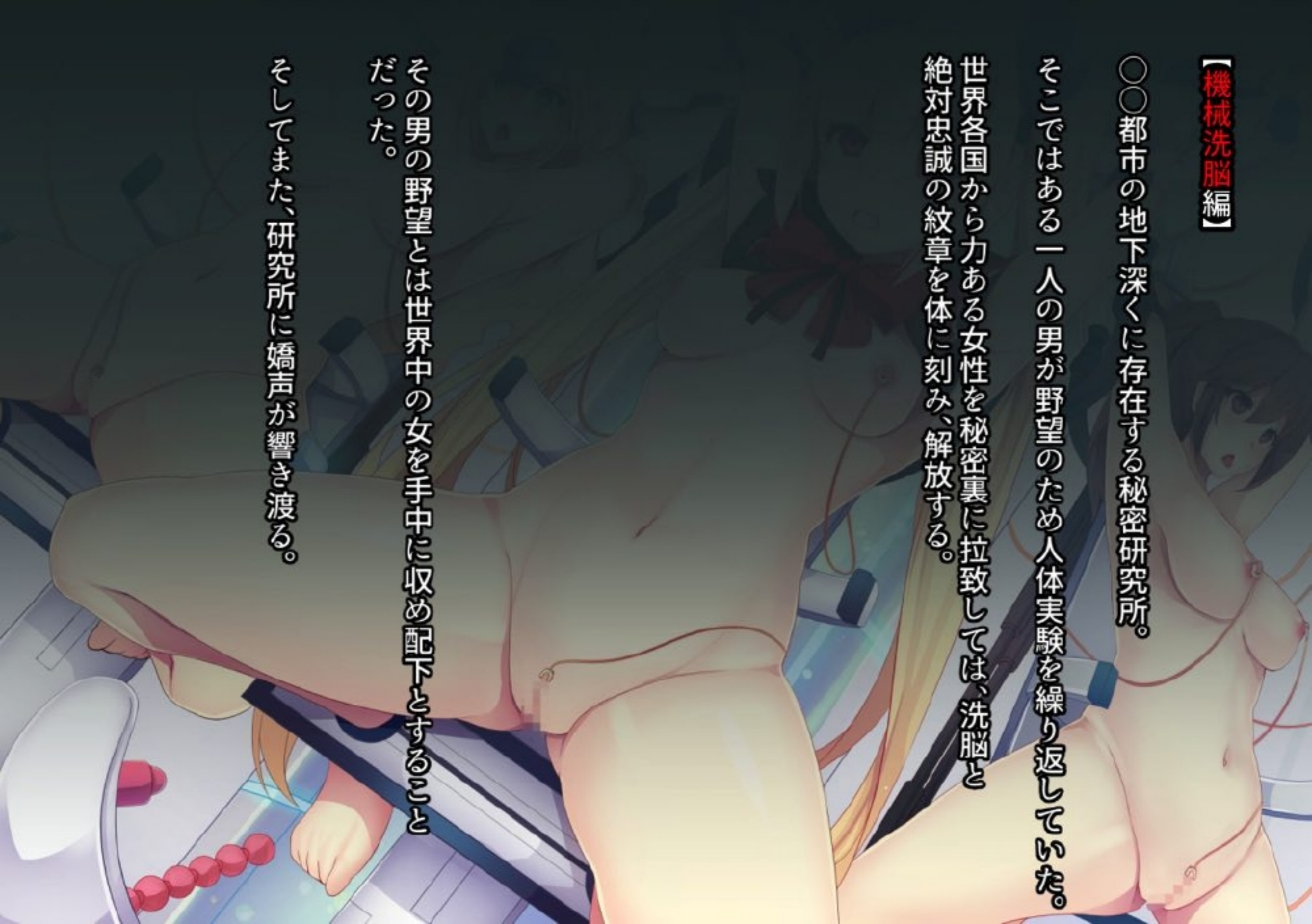
〇〇都市の地下深くに存在する秘密研究所。

そこではある一人の男が野望のため人体実験を繰り返していた。

世界各国から力ある女性を秘密裏に拉致しては、洗脳と  
絶対忠誠の紋章を体に刻み、解放する。

その男の野望とは世界中の女を手中に収め配下とする  
ことだった。

そしてまた、研究所に嬌声が響き渡る。





「んっ……いっああっ、はやくっ、解放しなさいっ……」

身体を走る甘く切ないうづきこい声をあげるレ○チエル。仲間とともに拉致され、機械に固定されたまま辱めを受けていた。

周囲では数人の白衣を着た男達がニヤニヤした笑みを浮かべながら監視をしている。

既に開発されてしまっている身体は、恥部に挟まれたクリップから流れる微弱な電流に愛液を垂れ流し、嬌声を抑えることができない。

（まさかの全員殺してやるわ……）

屈辱に決意を固めると、「一人の男が周りに指示を出した。」

「いっ……き……っ……」

下腹部の疼きが強くなり、ビリビリとした快感がはしる。なにかの術式を発動したらしく、陰核を中心に魔法陣が浮かび上がっていた。左右の2人も同じように官能に悶えている。

「一体何を……んう！する、つもりなの……ああああっ！」

「際強い快感がはしり抜けたと思うと、信じられない光景があった。

「そんな……なにだよ、これ！」

女であるはずのないものがそこにはあった。術式で「一時的に変化させられたものである」ソレは自己主張するように反り勃っていた。

敏感なソレは電流にあてられただけで感じたことのない快感を伝えてくる。

「ひっ、ひっ、あっ、あっ、ごんごん、屈辱っ、あっあっ！」

未知の快感に、3人は腰を浮かせながら悶える事しかできない。



「あっ……あ……んんん……」  
術式が消え何事もなかったかのように消失した男根  
を気にする余裕もなかった。  
そんな快樂の余韻に浸る彼女達の頭部にヘルメット  
が覆いかぶさった。

白衣の男がまた指示を出しているのが聞ける。

まだ余韻が残っているながらも、いち早く意識を覚醒  
させたレ○チエルは身構えた。

「レ……んなものには負けないわ……せった……っっっ」



「ん…あつ♡はあ♡あ…♡いしゅでん…たまごあつ♡」  
【絶対忠誠の淫紋】を身体に刻まれたこととよって、これまでの  
価値観が全て塗り替えられ、精神的にも肉体的にも敬愛する  
ご主人様に全てを捧げる存在になった彼女達。

そんな彼女達は、彼女達のご主人様となった白衣の男を  
熱のこもった眼で見つめる。その視線には敵意は一切感じられず、  
ご主人様に対する忠誠と情愛で溢れていた。

白衣の男はその光景に満足した笑みを浮かべながら  
彼女達に近づき、愛液に溢れた秘部を撫でる。

「あつ…♡♡」  
その行為に嬉しそうな笑顔を浮かべる彼女達。




「これからたっぷり可愛がってやる…。私の忠実な下僕  
としてな」

白衣の男のその言葉で、彼女達は身体を震わせ…

歓喜の失禁で答えたのだった。





彼女達は解放された。  
そして何事もなかったかのように日常に戻っていった。

世界を救う要として、数々の戦いを繰り広げる彼女達。

しかしその本性を誰も知らない。

凛々しいその顔つきの裏には、情欲に溺れた雌の顔と  
怪しく光る淫紋が輝いている事を。

【屈辱の土下座編】

美しく、誇り高い吸血鬼の姫である彼女は取り合う必要もない格下の相手と侮っていた者に周到な罠にかけられ、敗北と同時に力を封じられてしまった。

そして彼女は、往來で一糸まとわぬ姿に剥かれ男の前に跪かされた……。



「なぜ私がこんな売女まがいの無様な格好を……！」

まだ明るい街道の真ん中で彼女は屈辱に震え、怒りをあらわにする。

「いい格好だな。まさか、かの吸血鬼の姫様が全裸で俺に跪くとは……」

「白々しい……！あんな卑怯極まりない方法でしか私に迫れなかったクセに……！」

「どんな形であれ負けは負けさ。その見下していたクズに敗けたんだよお前は」

「……っ……ほんとどうだ、クズね……！」

「一体いつまでこうさせておくつもりなの……!!!」

強い嫌悪をこじまさせながら男を威嚇する。

「まあ、その無様な姿を眺めておくのも楽しいんだが、条件次第で解放してやるよ」

「今この場で俺に詫びを入れる。額を地面に擦り付けてな」

「私に土下座で許しを請えというの!?!」

そのような屈辱は断じて受け入れられない。しかし男は淡々と告げる。

「ああ、俺に負けてこうなっただけで恥ずかしいから許してくださいってな  
そしたらその格好やめさせてやるよ。」



「ぐ、う、う、う……」

あまりの屈辱に歯を食いしばりながらも、彼女は男ごころうべを垂れる。

「わ……私は貴方様の策に嵌まり、ぶ、無様、に……はい、ぼくしました……!!」  
「本来の力を……封じられ、抵抗もできずに、裸ごさ……れ……ました。そんな  
憎い相手に……この恥辱を終わらせて欲しい、と……あ、あさましくも、  
懇願します……」

「無様で卑しい敗北者の………わ、わたし、わたしを、どうか、お許し、ください……!!」

ついに彼女は自身の敗北を口にしていたのだった。

惨めで屈辱的な口上を言い終え、頭を上げた彼女の下腹部には怪しげな刻印が浮かび、薄い光を発していた。

「また俺の畏に掛かったなあ？今のお前にぴったりのプレゼントしてやるよ」「感謝しろよ？！」

男はそう言ううと金色に輝くピアスを取り出し、彼女の両乳首に突き刺した。

「痛うっ!!!」

彼女は痛みに呻きを上げる。しかしそれと同時に信じられない言葉を発した。

「あ、ありがとうございます、います……」

彼女は自分が何を言っているのかわからず驚愕していた。すると男が笑う。

「ははは！まさか本当に感謝する」とはなあ！わかったか？お前が敗北を認め俺に頭を下げるのが、もう一つの仕掛けのトリガーだったんだよ。絶対服従のためのな……」

「私が…お前なんかには服従なんて、あるはずが…」

「なんだ、まだ分からないのか？ならもつとわかりやすい命令してやるよ」  
下卑た笑みを浮かべ男は命令する。

「さっきみたいに俺に頭を下げろ。その上で発情期の獣みたいに下品にケツを振れ」  
命令を受けた彼女の体は、その意思を完全に無視して動き出した。

「本当にこいつの言う通りに…!?やめて！見ないで!!!いやあっ!!!」

「ぎゃははは！いい眺めだぜ！あの吸血鬼様が本当に人前でケツ振ってやがる！  
この術式は発動すれば誰も逆らえない、わかっただろ？」

頭上にそんな言葉を聞きながら、男が止めていいと命令するまで彼女は尻を振り続けた。

「おい、もういいぞ、顔上げる」

彼女が頭を上げると、その顔には今までにはなかった深い絶望が見て取れた。

「嘘よ……私が、こんな男一人に……？」「度と逆らえない……、嘘よ、嘘……」

「安心しろ、辛いのは体と心が反発している今だけだ。たっぷりと調教して俺の命令に従うことが心からの喜びになるよう仕込んでやるよ」

その言葉に彼女は再び目に光を灯すと、男を殺意のこもった眼で威嚇する。

「殺して、やるわ……!!必ず……!惨めな最期を想像して震えていなさい……!」



—数ヶ月後。

男が自分の部屋に戻ると、そこには一人の女がいた。

「おかえりなさいませ〜♡主人様♡」

床に手をつき挨拶をするその姿はかつての面影は感じられない。彼女は下着とすら呼べないほど薄く小さい衣装に身を包み頬を上気させ、熱のこもった媚びた視線で男を見つめる。

「おい、乳首は勃ってるし股間も濡れているじゃないか？また俺のいない間に一人で慰めてたのか？」

「…は、はい♡ご主人様の逞しいオチ○ポを妄想して、…何度も♡ダメ…でしたか？」

「別にそこはどろいでもいいが、勝手に俺をネタにしたことには詫びを入れろ…。」  
そう言われると彼女は興奮した雌の顔で準備に取り掛かった。

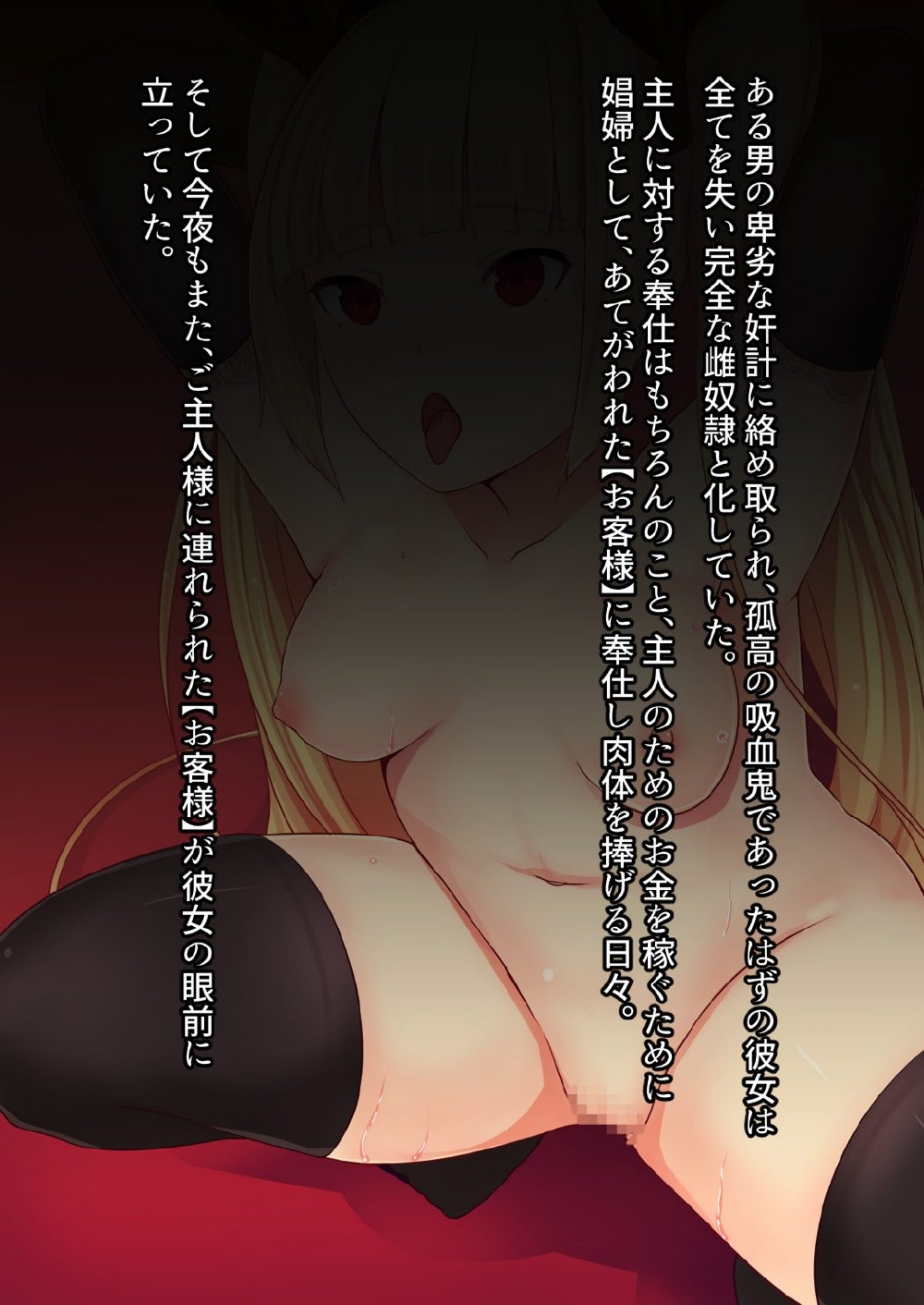
彼女はかつて怒りと屈辱に体を震わせ行つたはずの行動を喜びに打ち震えながら行う。

「わ、わたくしはあ……ご主人様の逞しいオチ○ポを勝手に妄想してオナネタに使つた下品でいやらしい変態マゾ雌奴隷です……♡どうか、どうかこの救いよりのない雌奴隷をお許しください……、許していただけなのでしたらあ……♡どんな罰でもお受けいたします♡どうか私に、罰を与えてください♡」

土下座のようである。その実、いやらしく誘うような腰つきで尻を突き出し罰を与えてほしいと懇願する。

そんな彼女に以前の高貴な面影はどこにもない。

ここに居るのはただ主人の命令に従うことに心からの喜びを覚える、もはや名前すら必要ない一匹の雌に他ならなかった。



ある男の卑劣な奸計に絡め取られ、孤高の吸血鬼であったはずの彼女は  
全てを失い完全な雌奴隷と化していた。

主人に対する奉仕はもちろんのこと、主人のためのお金を稼ぐために  
娼婦として、あてがわれた【お客様】に奉仕し肉体を捧げる日々。

そして今夜もまた、ご主人様に連れられた【お客様】が彼女の眼前に  
立っていた。

「ほお…これは、なんと」

本日の【お客様】である恰幅のよい男は感嘆の声を漏らす。

「あなたが今夜のご主人様ですか…？わたくし、もう待ちきれなくて…♡」

彼女は男の前に股を広げしゃがみ込み、だらしなく舌を出し男を見つめる。



「確かに、こんなに品のない女は初めてだ。礼節というものを教え込んでやる」  
男は薄い笑みを浮かべながら自身の肉棒を彼女の眼前に晒す。

「あはっ♡いただきます…あむ」

眼前で肉棒が脈打つと、彼女は心底嬉しそうにそれこむしゃぶりついた。

「んう…ずちゅっ…えるっ、ちゅぱっ♡ずちゅううううううう」

「おお…凄いで、すぐこども射精してしまいらうだ」

「ぶあっ、あむっ♡ありがとっ♡いっぺんいっぺんうまぶ…ちゅるっ」

「…いいぞ、もつと喉を使ってシゴけ！」

男が腰を前後にし口内深くに肉棒を捻じ込む。

「ぬぶっ!? おぶっ、じゅぶっ…うんむううん!?」

苦しそうに呻きながらも決して咳き込まず、啞え込んだ肉棒を徹底的に刺激する。

「んむうっ♡あむ、れるっ、ぢゅっ♡」

献身すら感じる大胆で丁寧な責めは男を否応なく高まらせていった。

「いらぞりー！このまま出してやるー！一滴残らず、受け止めるー！」

男はそう言って一層激しく腰を動かして、高まっていた精を彼女の口の奥で吐き出した。

「んむううううり！あぶっ、らめ、のみきれたや…んぶっー！」  
吐き出された大量の精をなんとか口内に押しとどめる。

「はあ…はあ…凄じやないか。本当に口からいぼさならなんて」

「あはあ♡おくひのじやか…どろどろのれ、いっぱいらら♡」



「待て、飲み込む前に口を開けて見せてみる」  
射精を終えた男が言う。

「ふぁい♡んむっ♡あーん」

彼女が口を開けるとそこには大量に注がれた白濁が溜まっていた。

「そのまま飲み込むんじゃない。しつかり味わって飲み込むんだ。いいな？」

「ふぁい…♡…わかりまひたあ…♡」







彼女が再び口を開けるとそこには先ほどまでとは違い、精液は一滴も残って  
いなかった。

「ふふふ…どうだったかな？私の精液は…」

「はい、さいこうでしたあ…♡私のお口、ご主人様の精子の味覚えちゃいましたあ♡」  
彼女は蕩けきった表情で男を見つめる。そんな彼女の股間は蜜をしたらせ  
ながら何かを欲するようにひくついていた。



彼女の行為は映像で記録され、これらは全て裏のルートで高額販売された。もともと有名な存在であったがために求めるものが後を絶たず、莫大な利益を生んだ。

そして彼女はまた身体を捧げる。愛するご主人様のために。

【裏切りの調教編】

敗けるはずがない戦いだった。かつての仲間達に裏切られるまでは。信頼できる仲間であり切り札でもある彼女達を率いて戦いを挑む。

「これで終わりね。無様に地面に這いつくばりなさい」

勝ちを確信した声が響く。しかし、

「ごめんね？レ○チエルさん」

「っ!?あなたたちっ、なにをっ!?あああっ!!」

突然の味方からの攻撃に対応できず、苦痛の声をあげてしまう。

「ご主人様の命令です。おとなしく捕まってください、レ○チエルさん。」

「なにを…言っ…まさかっ!?あがっ!」

突如振り下ろされた巨大なハンマーに叩きつけられ、気を失うレ○チエル。

「めんどくせーなー、これでいいだろー」

「あまり手荒なのは良くないと思いますが…、さて、連れて帰りましょう」

そんな彼女達に「ご主人様」が近づいた。

彼女達は一齐に雌の顔を浮かべたのだった。

「あなた達っ正気に戻りなさい！」

薄暗い室内のベッドの上に、鎖で繋がれたレ○チエルが拘束されていた。その周りを囲むようにかつての仲間達がいた。

「私は正気だよ？でも、ご主人様に出会って、もっと素敵なお話を聞いたの」  
「何を言ってる……んあっ！」

「レ○チエルさんにも、是非分かってもらいたいです……♡」

そうやって、彼女の全身を愛撫し始める。

「んあっ……あっ、やめな、さいらっ！あっ」  
「ふふっ、レ○チエルさん可愛い声あげてる」

両乳首を弄られ、プ○チナに秘部を舐められる。

「あ、あなた達でも、許さな……んほおっ!？」

「ちゅっちゅるっ……こいつ、尻穴ほじくられて感じてるぞ」

「レ○チエルさんで、お尻の穴で感じる変態さんだったんですね」

「あぁっ！ちゅちがっ、んおっおっや、めっ！」

「もう、素直じゃないんだから……、私達が素直にしてあげますね……♡」

—数時間後—

「ふふっ、レ○チエルさんとても気持ちよさそう。いきたいんでしょ?」  
身体はいききたいのに、「度もイかせてもらえない。  
数時間にわたり身体を弄られつづけたレ○チエルはとうに限界を超えていた。

「あっああっ! イ…ききたい…イかせてっ…!」

「イかせてください、ですよね?」

「ああっ! イ、イかせてください!」

「よく言えました。ご褒美、あげちゃうね」  
全身の愛撫が激しくなる。

「ちゆるっちゆるっ、おらおら派手にイっちやえよ、うりうりま〜」

「イクときはちやんと、お○んこイクって言うのよ?」



「はっはいっ、んあっ、あっあっあっあっ、イクっ！お〇んこイクっ！イクううー！」  
全身を痙攣させ、愛液を噴出し絶頂するレ〇チェル。

「ふふっ、よくできました♡。次はご主人様に可愛がってもらおうね♡」



唐突に室内が明るくなり、二人の男が姿を現した。

「ご主人様！」

セ○カ・ノ○ル・プ○チナが男に媚びるような熱い視線を向ける。

「っ！あなたが彼女達を……っ!!!」

ただ一人憎しみのこもった視線を向けるものがいたが、愛液で秘部をぐしよぐしよに濡らしながらの態度にむしる滑稽であった。

「ご主人様！ご主人様にそういう態度、ダメでしょ？」

「これからたっぷり可愛がって頂けるんですよ」

「ご主人さまの良さがわからないなんて、残念な奴だなー」

次々に男を褒めたたえるセ○カ達にレ○チエルは絶句する。

「ごんなやつに……あっ！お下るしなぞらー！」

幼い子供におしっこをさせるように、両脇から抱え上げられる。

「ごい、ごんなに濡らして切ないでしょ？ご主人様に気持ちよくしてもらおう？ご主人様の素晴らしさがわかるから……♡」

「っ……やめっ……こないでっ! あっ……ああっ」

絶頂の余韻と、両脇を抱えられた状態では、逃げることはできない。

否定的な言葉とは裏腹に、秘部はなにかを期待するように愛液を溢れさせていた。

「あ、ああっ……んぎいっ! あっああああん♡♡♡♡♡」

男のモノが挿入され、淫らな水音をあたりにも響かせる。

「なにっ、これえっ♡あっ♡あっ♡大きいっ♡こんなっ♡きもちいいっ……っ、ちがっ、気持ちよくなん……かっ、ない……んあっ♡んにゃあ♡」

嬌声を上げ、愛液垂れ流しながらも、否定的な姿勢を見せる。

「もう……。やっぱり素直じゃないんだから、だめだよ?」

「あっ♡あっ♡気持ちよくなんかないっ♡」

「これだけ濡らしといでよく言うな……また尻穴弄ってやるうか?」

「こんなに激しく突いて頂いて……ん♡羨ましいです……♡」

男はレ○チエルに突き入れながら、セ○力達に指示を出し  
機械を取り付けさせた。

「あっ♡あっ♡んんっ!? あっ♡外しなさっ…んあっ?♡  
ああああああああん♡あがっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡!!」  
もはや絶叫とよべる嬌声をあげ、快楽に全身を痙攣  
させる。

「この機械、ご主人様がヨ○ノエさんに命令して作りさせた  
んだけど…感度凄くなっただでしよっもっど気持ちよくなるよ」

「ああああああん♡だめっ♡だめっ♡だめえっ♡」

襲い来る快楽の波に、もはや意味のない否定の言葉しか  
発することができない。

「んあっ♡あっ♡はげしい♡んだやっ♡」  
追いつめるように男の腰が早く、激しくなる。

「もうむりいっ♡むりいっ♡こんらのがまんできたやららっ♡」

「あっ♡いっ♡いっ♡いっ♡ちやうらうらう♡んだやああ♡」

男の射精に合わせて、激しく絶頂してしまう  
全身を痙攣させ、涎を垂らしながら愛液噴き出した。

「レ○チエルさんすごい♡私もいつちやいそうになっちやった……」

「私はいつちやいました……♡ご主人様、後で♡褒美下さい……♡」

「あっ……♡んっ……♡はあっ♡んんっ……♡」

「ふふっ♡お、とっても気持ちよかったですよ？」

「は、はららら……♡とっても……気持ちよかったです……♡  
お○ん、服従しちやいましたあ……♡」

「これでご主人様の素晴らしさが分かって貰えましたね！  
ッ○キにもわかってもらいたいなあ……♡」

「あっ♡んっ♡もれひゃう…♡おしっ…でひゃう…♡」


呂律が回らない声で、尿意を訴えた。  
それを聞いたセ○力達は顔を見合わせ、笑みを  
浮かべると、さらに高く腰を持ち上げた。

「主人様に見てもらいましたようねー？おしっ…♡」

「ふあああっ…がまん…できない…♡あっ…でひゃう…♡」

ぷしゅあああ、と盛大に失禁してしまう。  
以前の彼女からは想像もできない姿だった。

「ふへえ…♡気持ちいい♡」



この人に服従しなければいけない。  
頭で考えるよりも身体で理解してしまった彼女は  
陥落した。  
そして彼女達は主人のために新たなターゲットに  
狙いを定める。

「ねえ…ツ〇キ、お願いしたいことがあるんだけど…いいかな？」

服従の連鎖は止まらない。

【恥辱の踊り子編】

身体を意のままに操る能力。

そんな相手に敗北してしまった姫様。

散々身体だけを嬲られ、そして知る人ぞ知る怪しい店に  
売られてしまう。

心は折られていない彼女は反抗心を隠さない。

そんな彼女に待ち受ける結末は…。

「くっ……こんな……なせ、わたくしが…」

彼女は局部しか隠せないような小さな布だけを纏い  
大勢の観客の前で下品に股を広げていた。

「皆さま大変お待たせいたしました。今宵は舞台に新しい  
踊り子がかかります、どうぞお楽しみください」

会場内にアナウンスが響くと欲望に満ちた歓声が響く。

そんな中、特別な術式によって彼女の耳にだけ声が届く。

「お客様がお待ちかねだ。【たっぷり濡らしてアピールしろ】」

「なっ……ま、まちなさっ……ひぐう!!!」

脳内に響く男の声に反論しようとした彼女の体が  
途端にピクンと震えた。



脳内に響く男の声に命令された彼女の股間は濡れ始め  
トロトロと蜜が滴るほどになっていた。  
そんな彼女を見て興奮した観客たちが続々とステージ  
前列に群がり始める。

「んっ！くっ！みるなっ！その醜い顔をつぶすわよ……！」  
彼女は羞恥と怒りとで顔を真っ赤にして威嚇する。

そんな中ステージに曲が流れ始め、周囲の少女・女性達が  
それに合わせるように腰を動かし踊り始めた。

「さあ……、【腰を振って踊るんだ】。無様にな……！」

「ふっ！いやっ！くっ！こんな屈辱……っ！」

彼女の意思とは反対に、腰がゆっくりと動き始める。  
しかし、その動きはぎこちなく周囲の男たちからヤジ  
が飛び始めた。

「だれがっ！あなた達のような屑を喜ばせ…んひいっ!!!」  
彼女の動きに焦れた観客の一人がステージに上がり、  
激しく振動する太いパイプを彼女の秘部に捻じ込み  
落ちないように衣装で固定した。

「ひっ、ぎぎ…やめっ！あ、ああん!!!」

突然の強い振動で膣内を掻き回され、愛液をまき散らす。

「いやあっ！みないで…あっ、あん!!!とめてえ…」

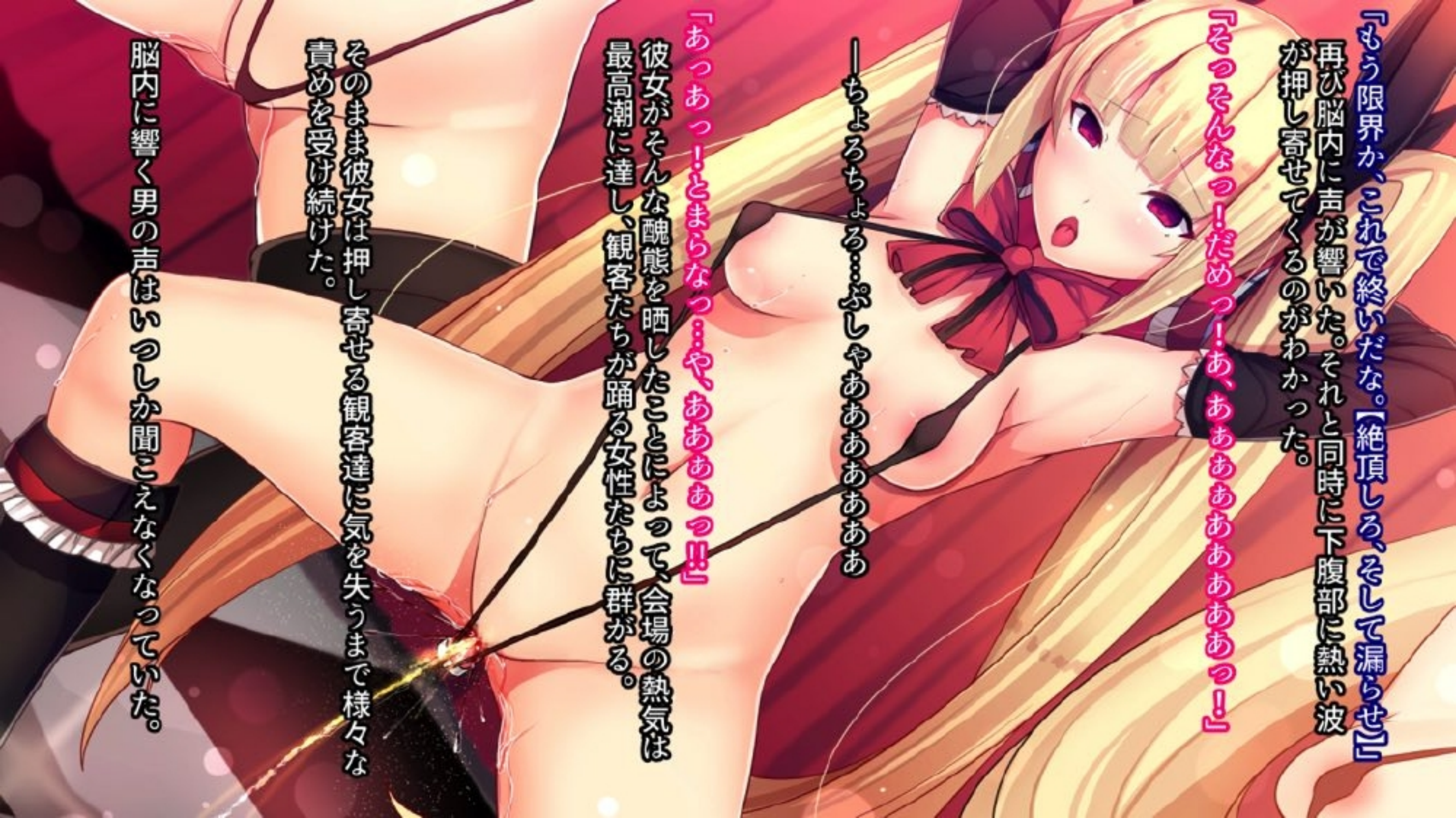
「んぎいっ！あっああっ、とめっとめてっ、ひぐさうっ！」  
膣内に響く快感と衝撃に腰をガクガクと震わせ、  
脚はガニ股と内股を交互に繰り返す。  
その無様な姿に観客はさらに熱を帯び、ステージは  
盛り上がっていく。

「こんなっ、よくもこんなっ…殺すっ、かならずんひいっ!!」  
それでもなお抵抗の姿勢を崩さない彼女に左右の女達が  
笑った。

「やめとけって、さっさと認めて気持ちよくなっただほうが  
自分のためだぞ〜、あんっ♡」

「そうですね。とっつても気持ちいいですから楽しみましょう？」  
それは彼女がよく知る仲間達の声によく似ていたが、  
彼女は自身の快感に耐えるのに精いっぱい気づかない。

「だれが、あなた達のように…なん、てる！んんっ！」  
そういう彼女だが、限界は確実に近づいてきていた。



「もう限界か、これで終いだな。【絶頂しろ、そして漏らせ】」  
再び脳内に声が響いた。それと同時に下腹部に熱い波  
が押し寄せてくるのがわかった。

「そっそんなっ！だめっ！あ、あああああああっ！」

——ちよろちよろ…ふしやあああああ


「あっあっ！とまらなっ…や、あああっ！！」

彼女がそんな醜態を晒したことによって、会場の熱気は  
最高潮に達し、観客たちが踊る女性たちに群がる。

そのまま彼女は押し寄せる観客達に気を失うまで様々な  
責めを受け続けた。

脳内に響く男の声はいっしか聞こえなくなっていた。





「あ、はぁ♡わたくしは皆さまの前で全てを晒して…♡」  
会場の熱気が高まり、ステージに流れる音楽が変わった  
と同時に踊る女性達が一斉に纏っていた衣装を脱いだ。  
それにより会場の熱気が最高潮に達する。

「はぁ♡はぁ♡皆様の…視線が…熱い♡はぁん♡」  
彼女と踊り子達の腰の動きが熱を帯び早くなっていく、  
ステージのクライマックスを迎えようとしていた。

「あっ……あんっ♡み、みなさま、今宵の催しもいよいよクライマックス……ですっ、私たちの……痴態を最後までご覧……くださいっ♡」

その言葉に、彼女達の雌の匂いに気が付くほど観客達が近づき群がる。

「あっ♡イっ♡皆様の視線でっ♡イっちやううっ♡♡♡」

観客たちに至近距離で見つめられながら、彼女達は秘部を視姦されただけで絶頂し潮を吹いた。なんとか倒れないように振る舞っている身体は絶頂の余韻と脱力とで大きく痙攣していた。

「ばあ……♡はあ……♡みなさま……ありがとうございますっ♡」

そして散々焦らされた観客たちがステージ上の彼女達に群がり始める。淫靡な舞台はまだまだ終わらなかつた。

きらびやかな装飾、淫猥な衣装、流れる音楽。  
惜しげもなく肌を見せ快楽に身をまかせる踊り子達。

彼女がステージに立つ日はそれだけで多くの者が  
やってくる。  
美しい肢体を観客に見せつけ、客の視線に欲情し絶頂する  
様を皆一様に楽しんでいた。

そしてまた、新人がこのステージに立ち抵抗しながら痴態  
を晒す。

「抵抗は無駄よ……♡大人しく快楽に飲み込まれるの……♡」

ステージの踊り子として君臨する。  
これも一つの結末なのかもしれない。



【敗北者の末路編】

戦いに敗北し、辛くも逃げ延びた彼女。  
目立った外傷はないが力が出せず動くこともままなら  
ない状態だった。

倒れ伏し回復に専念しようとする彼女だが、運悪くも  
素行の悪い都市連中に見つかってしまう。

動けないことをいいことにそのまま人気のない道外れ  
に連れていかれる彼女。

一方的な凌辱が始まろうとしていた…。

「ひひひっ、こんな可愛い嬢ちゃんか娼婦だなんてなあ」

「違うっ！私はそんなのじゃないといっているでしょう!!」

見目麗しい少女の服をはだけさせ脚をつかみ股を広げ、その秘部を凝視する男は一際大きく笑う。

「そんなに元気に喋れるのに動けないなんてなあ、実はそういうプレイが好きに変態なんだろ?」

「ふざけないで…!!今ならまだ、殺すだけで許してあげると言っているのよ…!!」

凄まじい殺気を放ちながら男を威嚇する。しかし男はそれを意に介さないように言う。

「いくらそういうのが好きでもあんまり調子に乗らない方がいいぜ?俺は気が長くねえからな…おらっ!」

「ぐ……かっ……!!! た……!!!」

「おいおい、本気で濡らしてすっぴんならのかよっ。らっぴんなんでもそこまでリアルにしなくてもいいだろ……」

「だから……プレイなんかじゃ、ない……!!!」

彼女の言葉を遮るように男は無理矢理前後に腰を動かし始める。

「ま、やってりゃ濡れてくんだろっ……」



「あっ……やめっ！い、やあっ！んうっ！」

長時間責められ続けた彼女の声は徐々に艶を帯び、  
湿り気すらなかった秘部からは今や蜜が溢れていた。

「随分感じてきたみたいだな？喘ぎ声も可愛いじゃねえか！」

「ひあっ！やっ！かんじ、てなん……かあっ！ふああっ！」

隠しきれない喘ぎ声が徐々に漏れ出し、男の情欲を  
さらさら掻き立てる。

「やっ！あっ♡もう、やめ、てえっ！ほんとに、ちがうのお！」

「何が違うんだよ。よだれ垂らしてよがりやがって…乳首だってガチガチに勃ってんじやねえか！」

全く動けず適度に脱力した肉体に与えられる熱を帯びた快感。

男も肉棒を包まれ搾り取られるような極上の快感を味わっている。

しかしそれ以上に、なんとか快楽に流されまいと抵抗している彼女に限界が近づいていた。

「う、おっ！やべっ、急に締まるっ!!」

ピュルル！ピュクピュクピュク！

「っ！！いやあ！膣内で、ださないでっ！熱いのがあっ！な、なかでっ！いま、こんなのお♡あ、ああああ！」

男の肉棒が膣内で爆ぜ、熱い精を注ぎ込む。

それと同時に彼女は一際大きな嬌声とともにピクピクと二度、二度大きく体を震わせた。

男が肉棒を抜き取ると大量に注がれた精液がこぼりと彼女の膣からこぼれた。

「嬢ちゃん、最高に気持ちよかったぜ…嬢ちゃんも気持ちよくいけたんだ、よかったじゃねえか」

「はぁー、はぁー、んっ…あうっ…」

彼女は散々犯された挙句に膣出しされ、勝手な理屈を並べる男の言葉に反論することができないほどに放心してしまっていた。

「金は…いらねえか。街のやつらに宣伝してやるよ。じゃあな」  
男はその場を後にし、犯された彼女だけが残された。

辺りは暗くなり、人の気配が完全になくなった道の外れに、未だ彼女は取り残されていた。

「や……もう……ゆるひて……だれか……たす、け」

彼女は動けず虚ろな目をし、その瞳には太く大きなパイプが根元まで差し込まれていた。あのまま動けずにいた彼女を何人も男が犯し続けたのだった。

正下




「お、まだいたのか。随分派手に犯されたもんだな」

そこにやってきたのは、最初に彼女を犯した男だった。

「そうだな……こいつを俺専用の肉便器にしちまうか……」

男はそう呟くと彼女の体を抱え上げ、その場から連れ去った。





—数日後。

鎖で体を拘束され、目と口を塞がれた姫様が大きな  
バイブの振動に身をよじっていた。

「んふうっ！…ふうっ♡♡♡ひゅっ♡♡♡んむうううー！」

大きく体を跳ねさせて絶頂に達する。

しかし、かつてのような抵抗はなく明らかにもたらされる  
快楽に身を任せている。

「ひゅっ♡♡ひゅっ♡♡♡ふうっ♡♡♡んふうっ♡♡♡」



「おらっ！くっ！何度犯っても、締め付けてきやがる……！」

「んふうっ！ひゅっ！はひゅうっ♡」

猿轡から唾液まじりの空気が漏れる。

淫靡な響きとともに彼女の秘部から溢れる愛液の量が彼女の今を物語る。

「くひゅ♡おっろお！おっろひへえ♡んんううう！」

「はあ…はあ…何言ってるか、わかんねえよ！この変態が！」

「ひゅっ♡ひきゅっ♡ひっひゃひふふうう♡んむう♡」

無遠慮に打ち付けられる腰使いに合わせて彼女の口から唾液が溢れ、秘部からは愛液が噴き出す。完全に肉便器として仕込まれた姿がそこにあった。




「ほら、久しぶりにこらいつを取ってやるよ……!」

男が彼女の猿轡を外すと、一層淫靡で甘い声が響く。

「りやめっ! さつきからずつとイキっぱなしなんれすう!」

「おっ♡おっ♡おち○ぼしゅいらっ……! おかひ、くなるうっ♡」




「ど変態女がつっ……おらっ出すぞー！受け止める！」  
そう言って男は肉棒を深く突き入れ、彼女の奥に  
たっぷりと精を吐き出した。

「おほおほおほおほ♡あついのきたああああ♡」

「あへえーっ♡いっぱい♡あかちゃん…はらむう…♡」

「散々犯ってきたからな…マジでガキができるかもなあ…?」  
彼女の膣内からたっぷりと注がれた精液がどろりと  
こぼれ落ちた。





その後、彼女の姿を見たものはいない。  
肉便器として肉体を捧げ続けたか、娼館で見かけたか  
という噂もあった。  
彼女が敗北していなければ、倒れ伏しているところを  
見つからなければ、また別の未来もあったかもしれない。

【異種姦編】

戦闘に敗北した彼女。  
力を封じられ転移させられた先は牢獄だった。

「不覚をとったわ…早く脱出しないと」

満足に動けない身体であたりを見渡す。  
薄暗い空間でよく見えないがそれなりの広さだった。

不意に背後で気配を感じる。  
振り返った彼女の目に映ったのは、  
彼女を覆い尽くすほどの巨体を持った、

異生物【オーク】の姿だった。



「グヒ…メス…コヅクリスル…」

彼女の小さな体はオークに軽々と抱えられ、その凶悪なほどに巨大な肉棒を挿入する体勢をとらされていた。

「冗談でしょう…!?! あなたのような下品な種族の交尾自体受け入れられるわけないでしょう!」

首筋にオークの荒い鼻息があたり、悪寒を感じながらも気丈に振る舞う。

「気持ち悪い…だ、だいいち…こんなもの入るわけが…」

「ツッコメバ、ヒロガル、メス、ヤワラカイ、グヒッ」

言っが早いかその肉棒を彼女の秘部に「一気に突っ込んだ。

—ミチチミチミチイッ!

「つぎ…がつ…だ、め…ぐる、じ…」

太すぎる肉棒を捻じ込まれ、彼女の声はかすれ  
表情が苦悶に歪む。

しかし痛みには呻く彼女をきにもかけずに力任せに  
抽送を繰り返した。

「いっ…ぎっ…ぬきな、さいい…ほん、とうに…」

「オデトコツクリシタ、メス、ミンナヨロコブ、オマエモ、グヒ」

「なに、をつ…そんな、ことお…ある、はず…んっ！」

無理な抽送であつたはずが彼女の身体に異変が  
起きていた。

ほんの数分前までに激痛に襲われていたはずの抽送に  
声が上がらず、少しづつ艶がかかり始めていた。

「オデノ、タイエキ、トクベツ、メス、ヨロコブ、グヒヒツ」

「あっ！あんーう、くう！ぬいてえっ……！」

彼女の声からは完全に苦痛を感じさせる呻きがなくなり、今はただ嬌声を我慢してるかのような声をあげていた。

「オマエノアナ、キツイ、モウデル、フゴオ！」

ードクドクドクツッ！ピュク！ピュルルツッ！

オークの肉棒から人間では考えられないほどの量の精液が彼女の膣内に容赦なく注ぎ込まれた。

「あっ、らっっーん！ん！ん！ん！んのおっ！あああああっ！！」

大量の射精を受けて彼女は考えられないほどの快楽に襲われ絶頂してしまった。

「あ……あう……ん！こんな……豚みたいなの、やつにい……ひあ……！」

絶頂の余韻と媚薬のような精液の効力によって、彼女は快楽の波に飲み込まれそうになっていた。

「あっ！あん！もっだめっ！ゆるっひてえ!!」

その後も何十回と精液を注がれ浴びせられ、彼女の全身は精液まみれになっていた。そして彼女も精液を浴びるたびに強くなる快感に支配され自我を保てなくなってきた。

「オマエ、ガンツヨウ、コワレナイ、キニイツタ、ヨメニスル」

「だ…だれがあ…あなたの嫁に、なんてえ…ひううっ♡」

何度も射精したはずの肉棒は未だ大きく硬いままで、この行為がまだまだ終わらないことを示していた。

—数ヶ月後。

「んあっ♡だ、めっ♡あかちゃんに、ひびいちやうっ♡」  
毎日のようにオークに蹂躞された結果、今の彼女は  
その身に新たな命を宿していた。  
そして彼女の鼻にはオークの所有物となった証が  
薄暗い牢獄の中で鈍く光っていた。

「あっ♡ふとくくてえ♡あっ♡いっ♡いっ♡あん♡♡」

彼女は度重なる媚薬のような体液の摂取と性行為に  
よる刺激で完全に理性を失い、オークとお腹の子に対し  
愛情のようなものまで抱くようになっていた。

「フゴツ、オマエ、サイコウ、マタ、ダスゾー！」

身重な彼女の状態など気にかけず深々と突き入れ、  
精液を注ぎ込む。

彼女はそれに応えるように獣のように鳴いた。

「おほおおおおおっ♡きたあっ♡ち○ぽみるくら♡♡♡」

絶叫とともに彼女は精液を注がれながら母乳を噴き出し、  
その快楽を堪能した。

「ラゴツ、フゴツ、キョウハ、マダタリナイ、マダ、スル」

「はあー♡はあー♡、やだ、きょうも、でしよ……♡」

彼女は情欲と情愛のこもった目で微笑んだ。

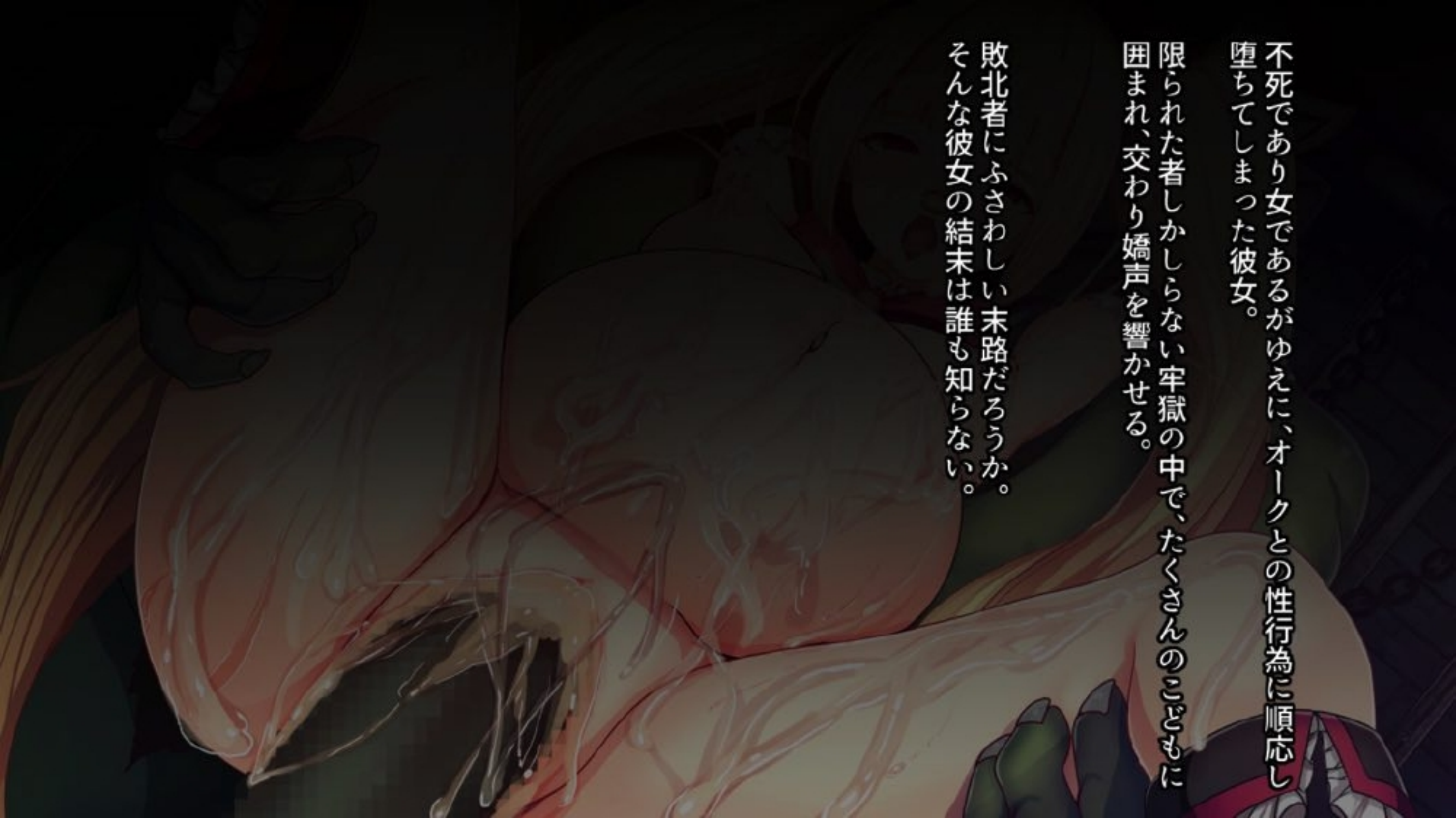
「らめええええ♡また、イクぅぅぅ♡♡♡」

母乳と精液まみれになった彼女の嬌声が牢獄に響く。

「わたくしいい♡このお〇んぼからはなれられないのおお♡  
にゃんどやってもがっちがちでえ♡お〇んこしつづけられ  
ちやうのおお♡♡♡」

お腹の中の子が胎動するのを感じながら、襲い来る快樂に  
絶叫をあげるのであった。





不死であり女であるがゆえに、オークとの性行為に順応し  
墮ちてしまった彼女。

限られた者しかしらない牢獄の中で、たくさんのごどもに  
囲まれ、交わり嬌声を響かせる。

敗北者にふさわしい末路だろうか。  
そんな彼女の結末は誰も知らない。



【敗北者の烙印編】

強大な力を持つ二人の少女。  
突如襲ってきた黒い液状生物相手に有利な戦闘を  
繰り広げるも、油断から拘束されてしまう。  
この状況から脱出しようともがく彼女達。

そしてその強大な力を手中に収めようと、黒い生物は  
動き出す。



「な、なんですか！これ…手足に絡みついて…う、動けない！」  
「引き剥がせない…っ…こんな格好でっ…!!」

二人は往来で黒い粘液に手足を絡め取られ、衣服まで剥ぎ取られ尻を突き出すようにがっちり固定されてしまっていた。

「いやですっ！はなしてっ！こんな…恥ずかしい…！」  
「…我…奪う…蒼…貴様ら…力…!」

「消滅させられなくなければ…拘束を、解きなさい…!」  
恥部を全て晒している現状に顔を羞恥に染めながら二人は解放を願う。

「力…喰…我が…受け…る、備」

粘液の一部が隆起し二人の尻にボタボタと垂りされた。

「ひゃあっ！？な、なんですかこれえ！？やっ、っ、冷たっ！」  
「うっ……く……気持ちの悪い、ことをっ！」

尻を這い回る粘液の感触に二人は不快感を覚える。  
しかし、すぐにその様子が変わり始めた。

「んうっ……ぬるぬるが……やっ、なに？身体が熱い……」  
「っ！これ、は……まさか、強い媚薬に似た効力が……あっ！」

粘液に含まれる成分によって体が発情し、二人の股からは愛液が漏れ出し始めていた。

「もう…随、ほぐれ…た…今…様達…中…我…注入、る」  
先程までとは違い明確な形を持った黒い塊が形成され  
媚薬で程よくほぐれた二人の尻穴に勢いよく挿入された。

—ジュポポポポツ!!

「んおおおおおおおつ…!!?」  
発情した二人の穴を快楽の槍が貫く。  
身体をガクガクと震わせる二人に黒い塊はなんの躊躇  
もなく侵入していく。

「んあつ!これ、はあつ!おおつ、うちがわ…からつ!!  
力を…んおおつ!!」

黒い塊は二人の体内に侵入し、体の内側からその力  
を吸い尽くそうと考えていたのだった。  
抵抗しようにも媚薬がもたらす快感の衝撃と思考力では  
それも叶わず、ただただ侵入を許すのみであった。

黒い塊の尻穴からの流入が終わると、二人の腹は侵入したモノによってぼっこり膨れていた。

「う……ぐ……くるしい……おなかで、あばれないでえ……」

「ふ……ー……お……お……ん……も……る……あ……る……ん……の……ん……ん……あ……」

体内に留まり、力を吸い取る異物に歯を食いしばって抵抗する二人。しかし、先ほど浴びせられた媚薬粘液はどんな痛みでも快樂に変換してしまっただけで強力だった。

そのため、力を吸い取られる脱力感とともに快感で徐々に全身が弛緩し、今にも体内の異物を尻から吐き出してしまっただけだった。

「も…だめえ…ちからはいらぬいいい…あつ、ああつ」  
「い、や…こんなところで、人に見られ…いつ、やあつ！」

—ぶりゆりゆりゆりゆりゆりゆり…！  
ついに限界を迎えた二人の尻穴からは流入していた  
大量の黒い粘液が滝のように噴き出した。

「んっあああああああ…あつっ…！…！…！」

全身が今まで感じたことのないような快感に支配され  
絶叫する二人。粘液から与えられる排泄感と腸壁全体  
を擦りあげられる未知の感覚が混じり合い全身を痙攣  
させ、快楽に我を忘れさせていられた。





「んほおおおおおおおつー！またでりゆううううつー！」  
侵入と排泄を繰り返し何度目かもわからない排泄絶頂  
ののち二人は力を吸い尽くされ、快感に体を痙攣させ  
嬌声をあげるだけになっていた。

「…様…無様！…前達…力は…高だ！…敗北者…似合い…やる」  
黒い塊の高笑いが二人の敗北を告げ大きくこだました。





黒い塊の一部がさっきまでとは大きく異なる変化をし  
焼きゴテのような形になったかと思うと、二人の尻に  
それが押し付けられた。

「みぎやつ!!!……うううう……」

「あぎいっ!!!……ああああ……」

押し付けられたそれが、強い熱を發し三人は一瞬悲鳴  
のような声をあげたものの、もはや脳まで快樂で埋め尽く  
されている二人にはそれすらも絶頂にたる快感であった。



コテ状の物体が消滅すると、二人の尻には敗北者の烙印が刻まれていた。

負け犬

「一生…消…烙印…敗北…の証…背負って、生…ろー！」

存在そのものに干渉する烙印。力を失いかけた無防備な二人は自身を形作る概念的な骨組みに直接"負け犬"の文字を刻み込まれてしまったのだった。

負け犬

「そん、なあっ…！…わらひがこんな…や、ああ…！」

「ちよる……しよわあああああ」

負け犬

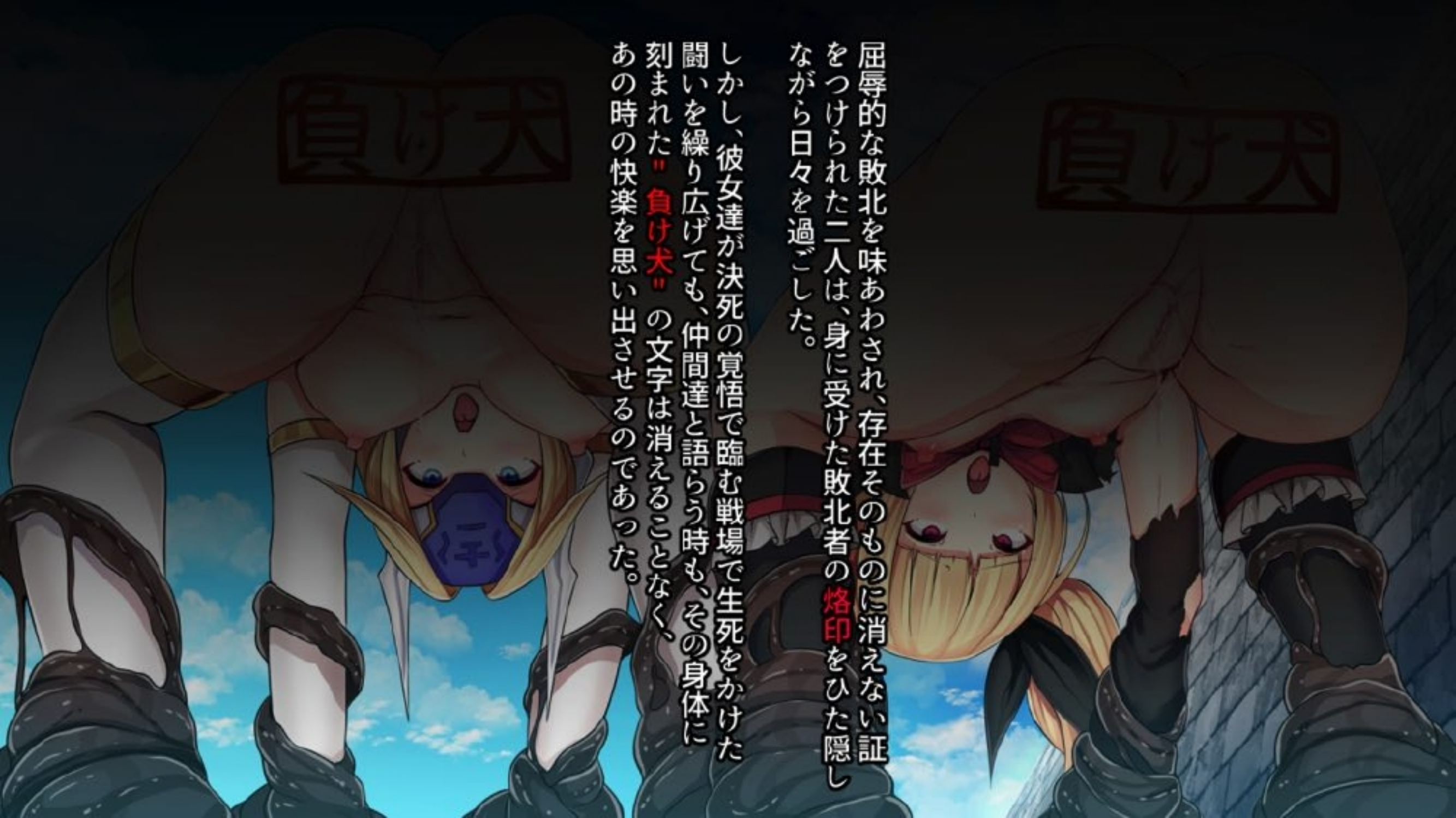
「あ、あああ……おひるっ」とまらない……」  
「あああ……でちゃってますう……みないれえ……」

全身の力が抜けてしまった二人はその場で失禁をしてしまう。「一度溢れ始めたそれは決して止めることはできず、最後の一滴までその場で放尿し続けた。

負け犬

「お……達はも……抜……殻。ワレ……も……用、無い」

黒い塊はそう言い残し、未だ快楽の痺れが抜けない二人の拘束を解かずどこかへ去っていった。



屈辱的な敗北を味あわされ、存在そのものに消えない証  
をつけられた二人は、身に受けた敗北者の**烙印**をひた隠し  
ながら日々を過ごした。

しかし、彼女達が決死の覚悟で臨む戦場で生死をかけた  
闘いを繰り広げても、仲間達と語らう時も、その身体に  
刻まれた**「負け犬」**の文字は消えることなく、  
あの時の快楽を思い出させるのであった。